

トピックス

台風 1 号発生 ～2016 年の台風はどうなる？～

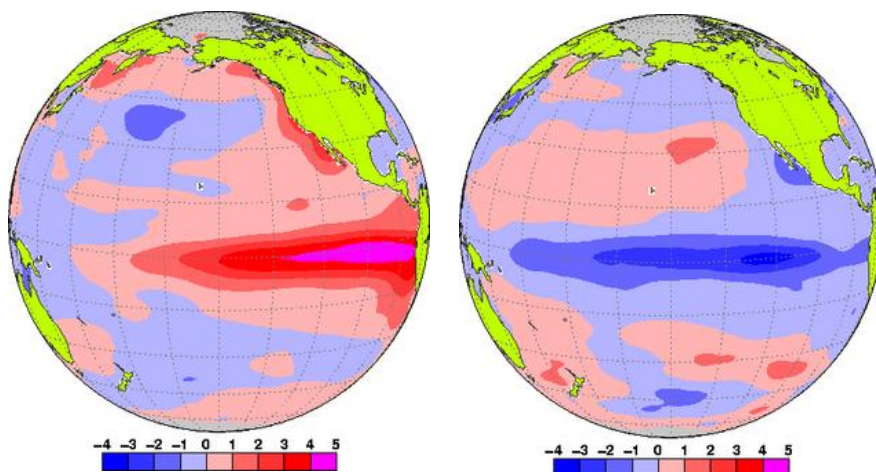
2016 年 7 月 3 日午前 9 時、西太平洋のカロリン諸島近海でついに台風1号が発生しました。2015 年 12 月 17 日以来、約 200 日ぶりの台風発生となり、台風 1 号の発生時期としては 1951 年の統計開始以降、2 番目に遅い記録となりました。

本 SENSOR では、今年と同様に台風1号の発生が遅かった年に共通する特徴を紹介し、そのような年の台風の傾向について気象庁の統計データをもとに振り返り、2016 年の台風の傾向について解説します。

1. 台風 1 号発生が遅い年に共通する特徴

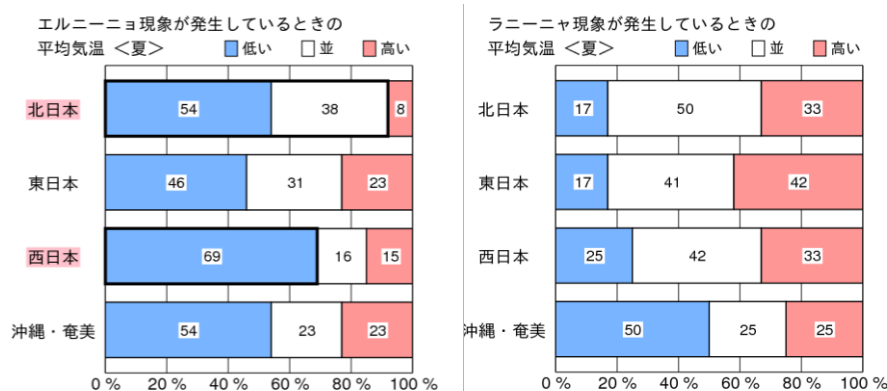
2016 年は 1951 年の統計開始以降、2 番目に台風発生が遅い年になりました。最も遅かったのは 1998 年で、過去、7 月に台風 1 号が発生した年は 1973 年と 1998 年の 2 年だけです。そして、この 2 年に共通する特徴として、「大規模なエルニーニョ現象がその年の春に収束し、夏にラニーニャ現象が発生している」ことが挙げられます。

エルニーニョ現象とは、図表 1 左図のように太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなり、その状態が 1 年程度続く現象です。逆に、図表 1 右図のように同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続く現象はラニーニャ現象と呼ばれ、それぞれ数年おきに発生します。日本においては、図表 2 のように、エルニーニョ現象が発生すると冷夏となり、ラニーニャ現象が発生すると、エルニーニョ現象ほど顕著ではありませんが暑夏となる傾向にあります。



図表 1 エルニーニョ現象（左）とラニーニャ現象（右）
(出典：気象庁 HP)

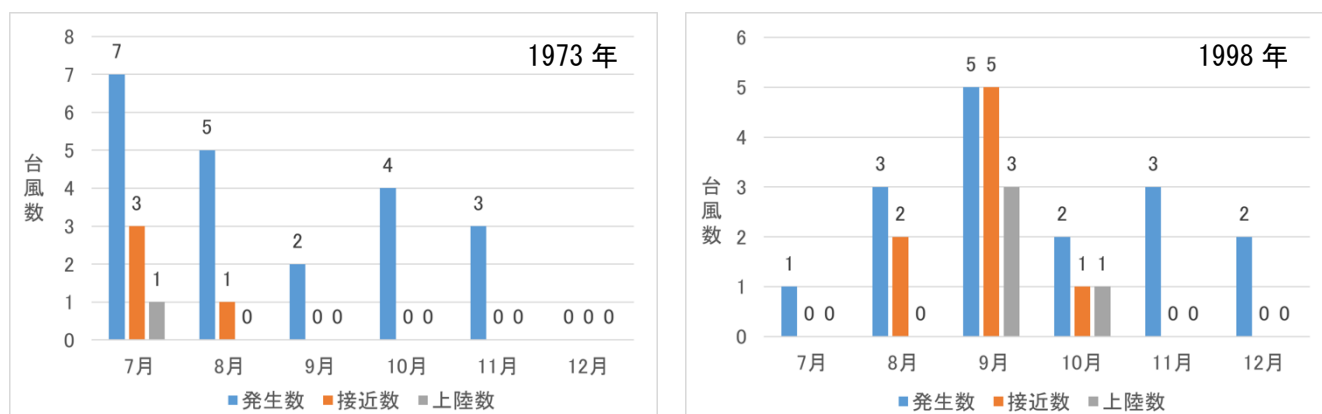
気象庁が 2016 年 6 月 10 日に発表したエルニーニョ監視速報によると、「2014 年夏に発生したエルニーニョ現象は、2016 年春に終息したとみられ、今後、夏の間にはラニーニャ現象が発生し、秋にかけて続く可能性が高い」となっており、今年の台風 1 号の発生が遅かった理由として 1973 年、1998 年と同様の影響があったと考えられます。



図表 2 エルニーニョ・ラニーニャ現象発生時の平均気温
(出典：気象庁 HP)

2. 台風1号発生が遅い年の台風の傾向

2016年の台風の傾向を考えるために、気象庁の統計データをもとに1973年と1998年の台風について振り返ります。図表3は、各年の台風発生数、日本への接近数、上陸数を月毎に表したグラフです。(接近と上陸の違いは【豆知識】ご参照)



図表3 1973年(左図)・1998年(右図)の月毎の台風発生数・日本への接近数・上陸数
(出典: 気象庁HPをもとに東京海上研究所作成)

1973年は、7月に台風1号から7号まで発生しましたが、年間を通して発生数21個、接近数4個、上陸数1個と平年値(1981~2010年の平均値/発生数26.2個、接近数11.5個、上陸数2.9個)と比較すると日本にとっては台風の影響の少ない年でした。

一方、1998年は、台風1号が7月9日に発生して以降、発生のペースは緩やかでしたが、9月に発生した5個の台風全てが日本に接近し、うち3個が上陸しました。年間では発生数が16個と平年値を大きく下回っていましたが、上陸数は4個と平年値を上回ったことで、日本の広い範囲で被害が発生しました。特に9月に2日連続で近畿地方に上陸した台風7号、8号による支払保険金の全社総額は約1,600億円と台風による支払保険金額では過去5番目(2016年7月現在)の損害となりました。

3. 2016年の台風の傾向

1973年と1998年に共通して台風の発生数が少なかったことから、2016年の台風発生数も少ないことが予想されます。

一方、気象庁の統計データによれば、台風の発生数と上陸数の間には強い相関はありません。つまり、発生数が少ない年であっても、必ずしも上陸数が少ないとは限らず、1998年のように、日本への影響が甚大となる可能性があります。

現在、台風の発生・通過する海域では平年より海面水温が高く、台風1号のように1度発生すると猛烈な台風に発達しやすいため、例年以上に台風の災害に備えることが必要です。

【豆知識】 台風の接近と上陸の違い

気象庁によると、接近とは「台風の中心が、当該地点または当該地域の地理的な境界線(海岸線、県境など)から、半径300km以内の域内に入ること」、上陸とは「台風の中心が北海道・本州・四国・九州の海岸線に達した場合」と定義されています。

沖縄は上記の「上陸」の対象に含まれないため、日本で最も台風の影響を受けているにもかかわらず、上陸数では毎年0となってしまう。それに対して接近数は最も多く、1951年の統計開始以降、常に年3個以上、平均すると年7.6個の台風が接近しています。つまり、日本への台風の影響を考える際には、上陸数だけではなく接近数にも注目する必要があります。

【参考文献・ホームページ】

- ・気象庁HP (<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>)
- ・デジタル台風HP (<http://agora.ex.nii.ac.jp/digital-typhoon>)